

お手紙の紹介

戦後、公家光子さんは夫の戦友に、夫の戦地での様子について尋ねる手紙を出しました。

戦死公報によると、陸軍の技師であった夫の公家保さんは、昭和二十年三月十五日にフィリピンで戦死(当時三十三歳)したと記載されています。

ここで紹介する二通の手紙は、光子さんから届いた手紙を読んだ戦友たちが、当時の様子を詳細に記して返信したものです。

この手紙と戦死公報、どちらを受け取ったのが先であったかは分かりませんが、手紙は昭和二十年代に届いたものであると思われます。

その後、光子さんはこの手紙を大切に保管していましたが、長男である靖孝さんが高校二年生の時に、四十一歳の若さで逝去。

以降は靖孝さんが引き継いで保管していましたが、戦中戦後の様子を次世代へ伝えていくための資料として、令和五年十一月に高知県遺族会へと寄贈いただいたものです。



拝復 お手紙有り難く拝見いたしました。

早速お返事を申し上げるべきところ、他所に手伝いに行っておりまして今日帰宅し、初めて知りましたわけでお返事の遅れましたことを、何卒お許しくださいます。

公家技手殿とは、ヒリッピンで同じ内務班に起居を共に致し、何かとお世話に相成った私です。

アメリカ軍が上陸以来、山地に逃げ込みましてからは、技手殿とは別行動を取って活動致して居りました。当時部隊は患者班と作業班とに分かれ、患者班は患者と、それらの人たちを世話するのが任務で、一つの班をなしておりました。公家技手殿は、この患者班に勤務されておられました。お体は至ってお丈夫でご活動されていました。

敵の攻撃が盛んになるにつれ、わが部隊の死傷者が続出し、加うるに雨季のため発病者が甚だしくなり部隊の活動力は極度に低下致したのです。三月初旬ごろから食料の切迫は言語に絶し、戦闘部隊さえ、一日百グラム食べられるか、どうかの状態でありました。

こうしたなかで患者班の苦労は、全く筆舌しがたい苦労の連続だったのです。各所に、移動する患者たちが、体力尽き果てて倒れており、全く悲惨そのものでした。故国の安泰を願い、故郷の空を拝して血涙を呑んで異国の山野に散つていった戦友の姿が、今まざまざと私の眼前に浮かび上がつてまいります。

敗戦下の今日、死して何ら優待されぬ御家族の方々の御胸中、いかばかりかとお察し申し上げ、新たなる涙にむせぶ私でございます。

四月に入つてからは、食糧全く尽き果て、加えて雨また雨。着るに衣なく雨に打たれながら、ただ一枚の毛布にくるまつて、ビタビタの水の中に寝た日も幾度あったこととございましょう。栄養失調に陥った兵は、こうした生活のために病魔の襲うところとなり、将棋倒しに倒れていったのです。

四月二十日、私共の部隊は、全く部隊行動がとれなくなりました。部隊長の悲痛な決別の言葉に、瘦せ果てし將兵は等しく男泣きに泣きくづれたのでありました。

そして一人、一合の米が渡され氣の合った者同士が三人、四人と組になり、最後の活路を見出さなくてはならなかったのです。

私は当時の軍属十人と、上陸以来の班長 三宅曹長殿を加えた十一人の組と『死なば共に』と誓い合い、一路急峻な山間地を縫つて、平地を目指して進みました。途中、前方のジャングルに人の動く氣配を認め、すわ敵だ!!と全員が足音をころして散開、前進しましたところ、それは友軍であることが分かりました。

しかもその中に、別行動を起こしてから四か月目に、懐かしい公家技手殿を発見し、びつくり致しました。しばらくの間は、互いに顔を見つめるばかり、感激で声も出ませんでした。

技手殿、ご無事でしたか、ああ、君も元氣だったか」二人は強く抱き合つて泣いてしまいました。しばらくして我に返り、過ぎ来し四か月の消息を語り合い、今後は行動を共にすることを約しました。

公家技手殿は、ひげは伸び痩せ衰え軍服はボロボロ。それに三日間、一粒の米も食べていないとの事で、身体の具合も、ただ痩せただけのようにではありませんでした。

そこで私たち十一人の持つ（一人一合）米を少しずつ出し合い、さつそく炊き上げて、公家技手殿に食べてもらいました。技手殿は有難う うまい、うまい」と涙しながら食べていました。

それから五日間、私たち十二人は一食もせず、たまにバナナの青い実を見つけてはそれを食つて行動していました。ところで、平坦地にあと一日ぐらいで出られるという日、バナナ林の中で待機していましたが、水のないのに我慢できなくなり、当時、一番元氣であつた私が水探しに出掛けました。

私は急峻なジャングルの中を敵兵に見つからないよう、あちらこちらと水を求めてさまよっているうち、幸か不幸かネグリート族の一味に発見され、捕まつてしまったのです。

間もなく一味の居間に連行され、四日ばかり監禁されました。

無論、私は死を覚悟し、戦友たち一行がどうかジャングルを脱出され、別な山地に活路を求められるようお祈りしておりました。

ある日のこと、ネグリート族の子供がどこからか帰ってきて、一葉の写真を私に見せて「この人を知っているか？」と聞くのです。

その写真を見て私は愕然としました。それはわが軍の全滅を物語る写真でありました。不鮮明ではあるが、軍刀を持っている人が十人、銃を持っている人が一人であり、民家の中に隠れている所をヒリップン軍とアメリカ軍の一部に襲われたものらしいのです。

さらに子供は、真ん中を貫通し、朱に染まつた『航空兵操典』を持ち帰っており、私に差し出すのです。震える手でそれを受け取り、私たち一行の指揮官 三宅曹長殿の所持品であることが確認され、私はびつくり仰天しました。

若くて精悍な顔つきをした三宅曹長殿、温かい人間味を持つ公家技手殿、そして同僚諸君ら十一人の死、私は一人ぼっちになってしまいました。前々から死は覚悟していましたが、捕らわれの身となり、一行と共に散れなかつたことが悔やまれて、幾夜も考えに沈んだことでした。

「公家技手殿は病死された」と言われる人があるとすれば、それはおそらく何かの間違いでありましよう。私は写真や航空兵操典、それに子供の言葉から考察して、技手殿の戦死は間違いないと確信し、今でも毎日心からご冥福をお祈りしております。

戦死された場所は、ヒリップンルソン島、クラーク市の南方約一〇キロメートル、ポーラックというところでございます。

公家技手殿について、書きたいことはいっぱいありますが、いざペンを手にしますと、思う事の十分の一も書けなく、まことに残念です。

技手殿たちの散り行きし当時の心を体し、新しい日本の建設に微力を尽くしております。この上は何卒お氣を持ちなおされまして、明日の理想に向かって前進してくださいませ。

御尊家皆々様の御多幸をお祈りしつつ、ペンを置きます。

前略 御便り確に 御主人様の御事にて御尋ねの件 小生の存知
居る範圍を御連絡致します

御主人が比島に転任されて来た時はまだ表面だけは平和な南国の
都や村でした 我々は日本人に生まれて幸福だなあと幾度思った事
でせう 他民族に対する優越感が敗戦に導いた原因 戦争を起こした
原因とも言ふ事が出来ると思ひます

米軍がリンガエン湾に上陸を開始したのは二十年の一月七日だった
と思ひます それから徐々に南下してクラークフィルドに來たのが
二十七 八日頃だったと思ひます

私も御主人も同じ小隊（部品工場）に属して居ましたのでそれ
まで作業を続行致、山獄地帯に籠り米軍に対しました 敵は米軍
の優秀なる近代兵器に徐々に奥山に奥山におおされて行き 我々は
食う米もなくなり谷川に生えた名も知らぬ雜草を食べたり 土人の
作った諸なんかを盗んでは生活致し 栄養失調にて死するもの数を
知らず 幸に私と御主人は共に四月十六日までは行動を共に致し
御主人は工員の小隊長として（当時少し足の方に出来物が出来て
歩行困難な様でした）工員の陣頭に立つて居られました

我々の部隊長は山本中佐と言ってクラークフィルドの第一分〇長
だった人ですが、全員を集めて鉄帽に一ぱいの粉の最後の食糧を
分配致し 我が部隊は之以上に多人数にて行動する事は出来ないから
各自が思ひ思ひの者と一緒になって日本が勝つ日まで比島人の食糧
を盗んでもどんな事をやってでも生きのびるよう伝達が有りました
なんと言ふ事でせう 我々は日本軍隊は部隊が解散したと言ふ
事は…… 我々は主人に見捨てられたる野良犬の様にどの様な行動を
して好いか解りませんでした

西も東も皆目わからぬジャングルの中に食料もなく数日を過ごし
ました 御主人も三 四人の工員と一緒に北方の山下大将の率いる
山下兵団と合流するのだと平野の方に出て行かれました

それからの事情は全然解りませんが、とても平野を突破出来るものではなく比島人と言ふ比島人は全部が米軍に協力致して居り到底駄目だったのです

それでも御主人は最期まで軍刀を持って居られた様でしたから恐らく立派な生をな最期だった事と思ひます

常々山の中の荒んだ生活の中に我々の心を満たして呉たのは
ふるさとの父母妻子の事でせう 技手殿も終始言つて居られました
今度内地に凱戦したら温泉廻りに田舎まんぢゅうでも動けなくなるまで食べてと……好い我々のおぢさんでした 鼻の下にチョビヒゲを生やして

二十年四月十六日に御主人の部隊は解散になりそれから五月十五 六日まで一か月間の内に御主人は最期を遂げられたるものと推定出来ます（戦友の言）

世めて○○○○○

之な便りを書くか、書くまゐるかと幾度迷つた事でせう
貴女様に死別の宣告でもしたような嫌な気が致します
又後便にて情報を御通知致したく思ひます

草々○○○○様

追伸

東京都

有本氏のご住所御一報願ひ度し

※○は判読できない文字

※二重取消線や書き損じも原本のまま